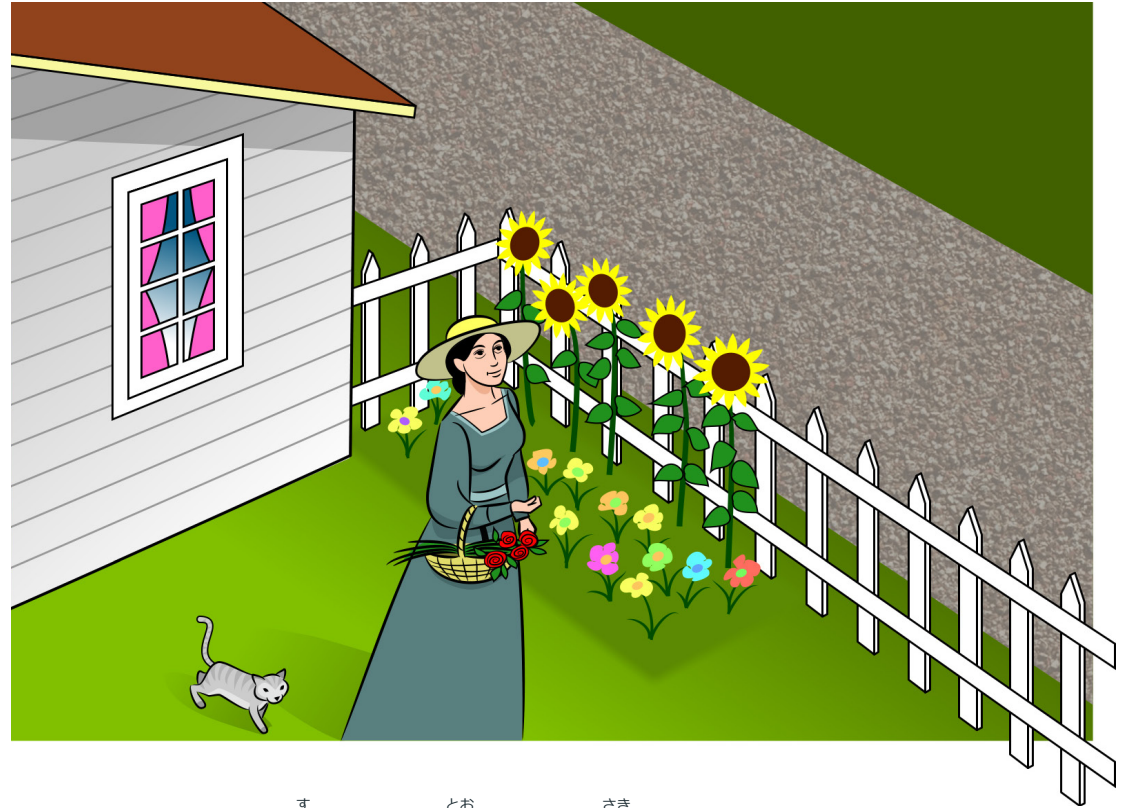
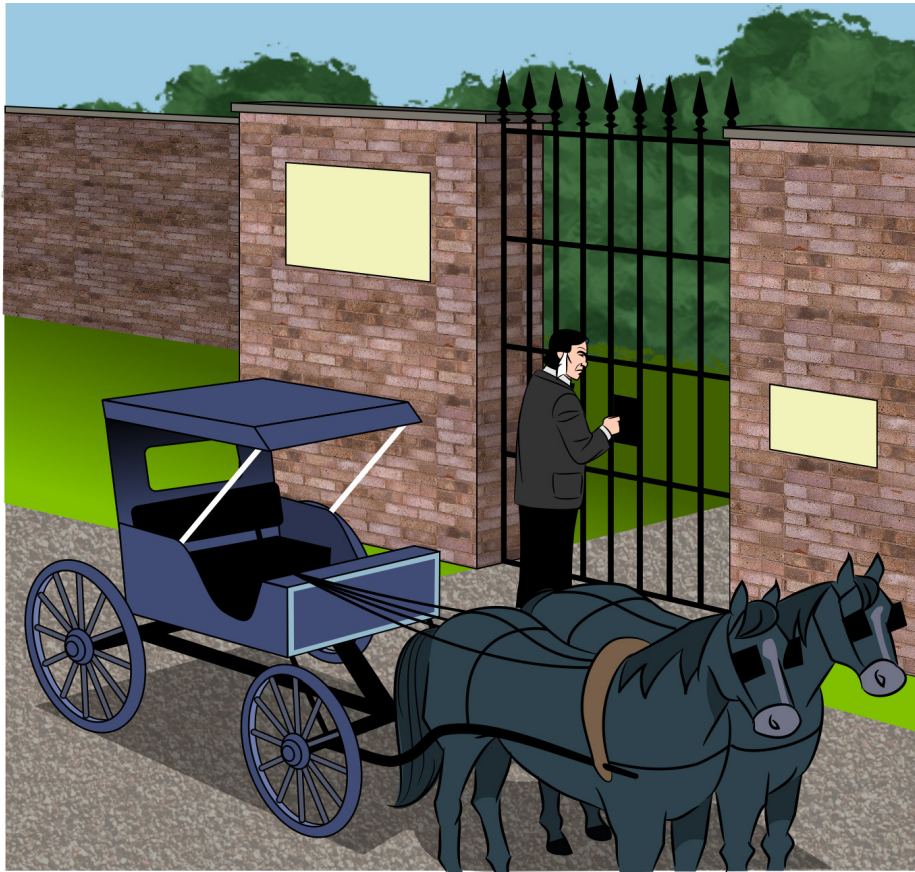


# ひとかたまりのパン

むかし ところ、ヘンリー・マーサーという お金持ちの 男の 人が  
いました。彼は、神を 信じないと 言っていました。「私は 無神論者だ。  
自分と お金以外は 信じない。」というのです。彼は 高慢な 人でしたが、  
ちっとも 幸せでは ありませんでした。

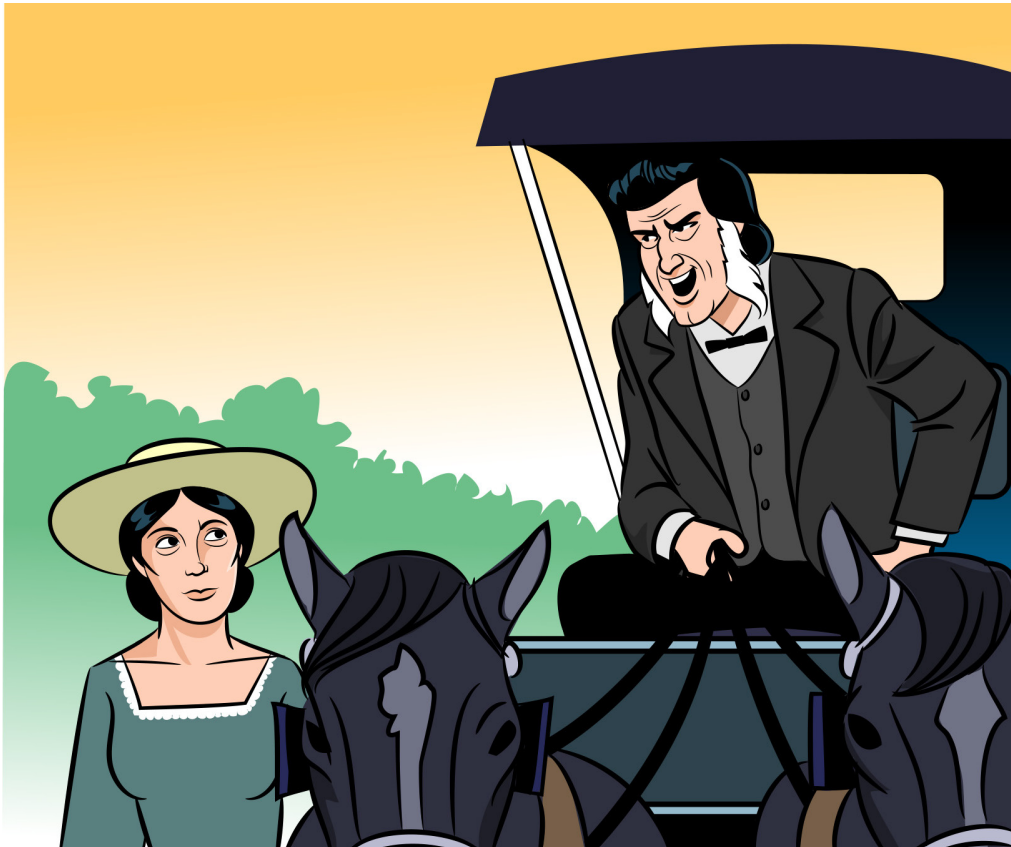


さて、ヘンリーが 住んでいる 通りの すぐ先には、ジャネット・スミスという  
貧しい 女の 人が 住んでいました。ジャネットは、イエス様を 深く 愛していました。  
貧しいので、大した 物は 持っていませんでしたが、ジャネットには、神様への  
深い 信仰がありました。彼女は、陽気でおだやかな 心の 持ち主で、他の 人達と  
接する 時も、いつも 明るい 面を 見ようと 努めていました。また、イエス様の  
話を よく していました。

ジャネットの 近所に 住んでいる お金持ちの ヘンリーは、彼女には お金や  
物なんて ほとんど ないのに どうして 幸せなのか、全く 理解できませんでした。  
また、どうして ジャネットが イエス様を 愛しているのかも 理解できませんでした。  
事実、ジャネットが 幸せで あることを ねたましくさえ 思っていました。それで、  
彼女の 幸せを 台無しに しようと、たびたび 意地悪を していました。

ある暑い日、ジャネットが市場で買った食料品をかかえてほこりだらけの道を歩いていると、立派な馬車に乗ったヘンリーが通りがかりました。ジャネットに近づいてくると、速度を落として声をかけました。「ごきげんはいかがですか？ 今日はお暑いですなあ。どうして神様は、あなたのために少しばかり気温を下げてくださいらんのですかねえ？」そして、自分の冗談がさもおかしいかのように笑うと、彼女を馬車に乗せてあげることもなく、自分は何て賢いんだろうと思いながら、さっさと行ってしまいました。

いろいろと困難はありましたが、それでも、ジャネットの心の安らぎと神様の愛への信仰は、決してなくなることはありませんでした。



ある日、ヘンリーが犬と散歩しながらジャネットの家のそばを通りかかると、彼女はだれかに話しかけているようでした。一体だれと話しているんだろうと思いながら、ヘンリーはジャネットの家の開いた窓のそばに近づいて、びっくりしました。ジャネットは祈っていたのです。

「主よ、私には、今日食べるためのパンがありません。また、パンを買うためのお金もありません。あなたは、ピリピ人への手紙の4:19で、私のいっさいの必要を満たしてくださいと約束されました。どうか、私を気にかけ、必要な食べ物を供給してください。イエス様のお名前での祈ります。」



いっしゅん、ヘンリーの心は動かされました。けれどもすぐに、にんまりと笑いを浮かべました。隣人へのいたづらを思いついたのです。ヘンリーは急いでお店へ行くと、大きなパンを買いました。そして、ジャネットの家にもどると、開いた窓の外から、そのパンを部屋の中に投げ込みました。

ジャネットは大喜びです！ 神様が、そんなにもすばやく祈りに応えてくださったのですから。すぐに、ジャネットはイエス様に感謝し始めました。「イエス様、このパンを感謝します。求めただけで、あなたはすぐに私の必要なものを与えてくださいました。」

その時です。窓の外から、ばかにした笑い声が聞こえてきました。ヘンリーが開いた窓から顔をつっこんで、声高に言いました。「ハッハッハ！ 神様なんかじゃなかったぞ。投げ込んだのは、この私だ！」

ところが、ヘンリーのがく然としたことに、ジャネットはただほほえんで、神様への賛美を続けました。「素晴らしいイエス様、感謝します。たとえあなたがヘンリー・マーサーをもち用いなければならなかったとしても、あなたはこのパンを送り届けてくださいました！」

ヘンリーの顔は、真っ赤になりました。またしても、彼の悪だくみは失敗に終わったのです。彼はすっかり腹を立て、じだんだをふみながら、行ってしまいました。けれども内心、もしかしたら神様は、本当に自分を使ってジャネットの祈りに応えたのかも しないと 思わずには いられなかったのです。

